

## コロナ禍における生存学研究所の情報保障について —障害学国際セミナー編—

中 井 良 平

(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

(文末の注意点のリストを参照いただきたい)。

### ■はじめに

2020 年初頭からの COVID-19 パンデミックに伴い、同年 6 月に生存学研究所に設置された「生存学オンライン事務局（以下事務局）」は、本稿で言及する障害学国際セミナーはじめ、急遽主流となったオンラインでの会合の場の運営を行ってきた。また、その先駆的な取り組みが評価され、事務局メンバーは、学会大会やオンラインセミナーの運営依頼を外部からも受け、行ってきた。

COVID-19 流行後の 2 年弱の間、オンラインでの会合はアカデミックな場でもかなりの程度普及していると考えられるが、手話・文字通訳を必要とする人、外国語を母語とする人など、多様な人々への情報保障を前提とした環境の構築は、多くの会合の場で不十分なものとどまっていると思われる。学会等がオンラインで行われることの一つの大きなメリットは、居住地や移動することの困難などによって生じていた対面での会合への参加障壁が緩和され得るという点にある。一方で、ノウハウ等の不足により、そのメリットが活かされていない、あるいは別種の障壁が生じている可能性が考えられる。オンライン／対面に関わらず、誰もが参加しやすい場ができるよう、環境の整備を行い続けていくことが肝要なのは言うまでもないが、急速に普及したオンライン会合の場における情報保障のノウハウについての知見の集積・共有が、現在多くの人に待たれていると言えるだろう。

本稿では、主に 2020 年 7 月に行われた障害学国際セミナーの準備の様子を報告することにより、事務局メンバーが直面した課題とその対応について記す。この場で記述できるのはあくまで限られた情報でしかないが、誰もが参加しやすいオンライン会合の環境構築の一助となれば幸いである。

また本稿では、多くの人が日常的に情報機器を使うようになった現在では一見言及するまでもないと思われるが、オンライン接続の方法（無線／有線）やその際の注意事項といった基本的な部分についても触れている

### ■「成功したコミュニケーション」とは

情報機器やその設置環境について、事前に確認を行い、特別な注意を払わずとも、オンライン会合への参加がうまくいく場合も多い。しかし、いざ運営する側となってみると、例えばわずかな回線の乱れが、会合全体に大きな影響を及ぼしてしまうことに気付かされる。オンラインで遠隔地の人々がつながっているということは、裏を返せば、運営側の機材等で起こった不具合により、ユーザー間で全くの情報の遮断が起こってしまうこともまた意味している。実際、2020 年の障害学国際セミナーでは、トラブルの芽を摘むために事務局メンバーが環境の整備に尽力したにもかかわらず、想定外の映像の中断が起こり、復旧まで時間を要したという事態が起こった。この際、通訳者の環境では映像と音声を受信できており、また配信も行えたため、通訳者による日本語音声・文字通訳情報のみが配信され、会の進行が完全に止まるという事態は避けられたものの、放送業界におけるいわゆる「放送事故」に類する状態となってしまった。

事務局発足当初から会合での文字通訳を担当いただき、また、事務局メンバーに情報保障に関する多くの助言をいただいている「NPO 法人ゆに」の窪崎泰紀さんから次のような言葉を聞かせてもらっ機会があった。すなわち、「どのような理由があっても、情報が届けられなければ情報保障は失敗であり、それは情報保障に限らずコミュニケーションの本質である」というものだ。多くの顔の見えない人々の参加するオンライン会合で、情報配信の失敗がそれぞれの人にとってどのような影響を与えたかを運営側が知ることは困難であり、また、参加者がトラブルに対して反応する手段も限られている。このことは、学会のような報告形態においては、運営側からの一方通行的な情報の伝達が起こっていることを示しており、それはオンラインの場合に限らない。また、多くの人々にとって、便利な情報機器はブラックボックスのよ

うなものである。そのことは、万全を期したつもりになっていても、我々の予期しない不具合が機器やアプリケーションに起こる可能性と、予期せぬ不具合が起きた場合の対処の困難さを示している。オンライン会合等の運営にあたっては、情報を正確に伝えることの重要性について改めて意識を巡らせ、入念に事前準備を行うことが肝要であると言えるだろう。

## ■事務局の取り組みと反省

2020年の障害学国際セミナーの様子については、第17回障害学会大会で事務局メンバーによる報告を行った。そこでは主に、各国の国内事情の影響などを受け必要が生じた、オンライン会議ソフトA（以下：ソフトA）からオンライン会議ソフトB（以下：ソフトB）への中継という取り組みについて記された。その際、複数の機器間の接続や、中継拠点としての立命館大学生存学研究所書庫の環境整備についての報告は別稿で行うとしたのだが、今日までその作業が行われていなかった。ここではその一部として、同セミナーにおける、回線環境の整備にまつわる事務局の反省談をご紹介したい。実際に直面してみるまで思いもよらぬ課題の連続であったが、どこでも起こり得ることだと考えられ、ケーススタディとして是非参考にしていきたい。

中井・安田[2020]及び中井・橋口[2020]でも記したように、2020年6月、COVID-19流行下で急遽オンラインでの開催に変更になった生存学研究所関連の催しに対応するため、事務局は設置され、7月に行われる障害学国際セミナーの準備にあたることになったのだが、メンバーである中井・橋口・安田の3名は、オンライン会合に関して特別な経験があるわけでもなく、素人同然であった。また、生存学研究所業務に2020年度から参加した中井は、主に遠隔地からオンライン作業を行っており、当日セミナーで拠点として使用されることになる生存学研究所書庫やPCの状況について、実際に目にするのはセミナー前日のリハーサルの段階になってからであった。

COVID-19流行下で大学の講義や行事も原則オンラインで行われるという警戒態勢の中、セミナーの総合司会を務める長瀬修教授は神奈川から、橋口・安田は京都で、中井は立命館大学東京キャンパスの設備を利用し、当日使用するオンライン会議ソフトと映像転送ソフトを用いてリハーサルを行い、いくつかの課題を解決しながら、セミナー前日に事務局メンバー全員が京都で顔を合わせ、

最終準備に入った。それまで互いに遠隔地で打ち合わせやリハーサルを重ねてきたのだが、筆者が京都入りしてから明らかになったのは、そのような問題があるとは思ってもみなかった、機材や環境の基本的な部分に関するいくつかのトラブルだった。

まず、映像の受信・配信を行う拠点とすることが決定していた生存学研究所書庫のルーターが老朽化しており、回線の切断がしばしば起こっていることが明らかになった。この問題は研究所関係者の一部には知られていたのだが、大学内では無線LANも利用でき、回線の切断が大きな問題となる場面がそれまで生じなかったことにより、解決すべき課題としては認識されていなかったと考えられる。回線の切断はセミナーの進行に致命的な影響を与えるため、すぐさま学内のITサービス及び施設利用担当部署に連絡がとられ、対策が検討された。結果、対応には時間がかかり、翌日のセミナー当日には間に合わないことが明らかになった。映像中継を行う拠点の別室への変更を急遽余儀なくされ、大学内各部署の方々に時間外ながら対応いただき、有線LANが利用できる大学内の教室を探すこととなった。

ここでも、無線LANの利用が一般的となっている昨今の状況が影響した。各部屋において、有線LANの利用頻度は少なく、床下に格納されたケーブルを探し出すことは困難を極めた。本来教室の床タイルは取り外しが可能となっており、その下の空間にLANケーブルと一体型のソケットが格納されているのだが、長期間床タイルの取り外しが行われなかったために、タイル同士が固着してしまい、取り外しが困難となっていたのだ（清掃時に使われる薬品の影響などと想定される）。加えて、IT部署の職員の方にも広い教室の床下のどのあたりにLANケーブルがあるのか見当がつかなくなっていた。事務局メンバーはなすすべもなく、タイルの取り外しとケーブル探しに奮闘する担当職員の方の作業を見守るしかなく、結果次第では翌日の回線環境の見通しが全く立たなくなってしまうという事態に陥る恐れがあったが、職員の方の尽力により、幸いにしてケーブルとソケットが探し当てられた。

不測の事態を想定してソケットからの分配は行わず、PC1台と回線（ソケット）一つを繋ぐことが予め決定されていた。教室には複数のソケット一体型のケーブルが配されており、隣接する教室と合わせ、PC5台分のソケットが確保された。また、本番時にトラブルが起こった場合を想定し、さらに予備のPCとソケットが用意された。

作業は夜遅くまで及んでおり、当初予定されていた、本番と同じ状態に機材を配置しての動作確認は翌日に後ろ倒しにされた。この時点では回線の問題はことなきを得たかに思われた。

しかし翌日、新たな問題が起こる。英語で進行するセミナーを日本語に訳し傍聴ラインとして配信するために依頼していた通訳者の方2名が到着し、本番で使用する機材のチェックを行ったところ、次の二つのトラブルが起こった。一つ目は、有線接続にもかかわらず、回線の途切れが起こってしまうというものであり、二つ目は、英語でのセミナーが行われるソフト A から音声聞こえないというものだった。

一つ目のトラブルは PC を変更しても解決されず、二つ目のトラブルは通訳の方用に用意された PC 3 台の内 2 台で起こった。当初の予定では、ソフト A のインストールされた PC-A から通訳お二人に英語音声を得てもらい、更にそれぞれに PC 1 台ずつ (PC-B, PC-C) を割り振り、ソフト B に接続、日本語訳を配信してもらうことになっていた。しかし本番までのわずかな時間中に上記トラブルの解決はできず、また別の PC や部屋を用意することもできなかった。対策として、切断の起こらないソケットから有線接続した、ソフト A の正常に作動する PC-A 及び、同じく切断の起こらないソケットから有線接続し、ソフト B のインストールされた PC-B の 2 台を用いることが決まり、2 名の通訳の方には 1 台の PC (PC-B) を交互に利用し、通訳音声を流してもらうこととなった。またこのトラブルの解決を図る過程で、予備の PC 1 台がオンライン会議ソフトのシステム要件を満たしていないことが明らかになり、当初事務局が利用予定であった PC を 1 台予備に回すこととなった。

結果的に、不測の事態に備え回線と PC を多く用意していたことが奏効したわけだが、このトラブルによる PC 不足で、メンバー 1 名が自宅に戻り、セミナー中の作業 (映像の録画など) を行うこととなった。3 室で行われた運営作業に対し、運営側の人員が 2 名となり、ソフト A で行われていたセミナーの映像トラブルによる傍聴ラインへの影響への対処が遅れたことは、中井・橋口 [2020] に記したとおりである。

## ■トラブルについての考察

前述の二つのトラブルに関する考察は次の通りである。有線接続の回線の切断についてであるが、複数の PC との間で問題が起こったことから、PC 側ではなく配線側

のどこかに問題があったのではないかと推測される。大学から借り受けていた一部使用機材がセミナー終了と同時に返却され、同様の条件での検証はできないのだが、大学の備品であった LAN ケーブル (ソケットと PC を接続) の使用期間が不明であったこと、また教室床下のケーブル・ソケット一体型の有線設備が、長年メンテナンスのされない状態にあったことを考えると、配線側に問題があったという推測は確からしく思える。

また、ソフト A 使用時の音声トラブルであるが、こちらに関してはまさにブラックボックスであり、問題そのものについての考察はできない。しかしながら、同様のソフトを用いた場合の同様のトラブルには、通訳の方もよく遭遇するというので、依頼時の約束とは異なる作業環境を、快く受け入れていただいた。

なぜトラブルが起こってしまったかについてであるが、一見事務局側の準備不足に帰着されてしまいそうであるものの、ここにも COVID-19 流行の影響があった。当時は緊急事態宣言が出て 3 ヶ月という時期で、多くの大学行事がオンラインのみで行われており、メンバーの出張に関しても、大学側との折衝が必要であった。自ずと、可能な限りメンバーの出張が少なくなるように作業スケジュールを組むという方向性に話がまとまり、前述のようにそれぞれが遠隔地から連絡を取り合いながら、ミーティングやリハーサルを重ね、セミナー当日及び前日のみ事務局メンバーが一堂に会するというものになったのだ。前日及び当日は、今でこそ当たり前になったものの、皆顔を合わせながらマスク外さず黙々と作業を進めるという、慣れない状況で緊張しながらの現場となった。

また、別稿で触れたいのだが、同セミナーでの試みは専門業者への外注が行われてもおかしくない高度なものであり、そのため作業の見通しが十分に得られなかったということもあった。

## ■まとめ

2021 年に同じくオンラインで行われた障害学国際セミナーでは、本稿の報告から改善された部分、更なる課題として残った部分があるのだが、そのことについては次の機会に触れたい。ここでは主に 2020 年度のセミナーについて本稿で行った記述から考えられることを述べていきたい。

まずオンラインでの開催といっても、その準備に際しては実際に作業を行う人たちが集まり、作業環境の確認



を含め、できうる限り本番に近い形式でリハーサル等を行うことの重要性が確認されたとと言えるだろう。

打ち合わせ等はオンラインで行うこともできるし、それが望ましい場合もあると考えられるのだが、その場合、得られる情報の異なりから、今回報告したケースで書庫の回線に関する情報の共有が抜け落ちていたように、思いもよらぬ課題が後から明らかになる可能性が考えられる。

詳細は別稿に譲るが、2021年のセミナーでも、通訳に関するトラブルが起こり、時間中に改善が行えないという事態が起こった。その際、コロナの影響もあり、通訳は完全に遠隔地から行われ、なぜ問題が起こっているかの確認と情報共有自体が困難であった（通訳業務全般を一社に委託しており、通訳者の方とは直接連絡を取ることでもできなかった）。トラブルの質が異なるため単純比較はできないが、2020年度のセミナーで、問題の起こったまさにその環境で通訳者の方本人と協議し、問題の解決を図ったこととは対照的な出来事であった。オンラインでの情報共有と、実際に集まって現場を確認できるようにしておくことの間には大きな差があるという、考えてみれば当然の事実気付かされる出来事であった。

問題への対応策としては、必要に応じて関係者がオフラインでも集まり、事前の環境整備を行い、問題点が見つかった場合直接対処できるようにしておくことが肝要だと言えるが、それはCOVID-19流行下における、人々の接触を避けようという方向性と一致しない対応策でもある。対面での作業をどの程度とするかは新規感染者数の増減を繰り返す流行の状況にも左右されることであり、悩ましい部分である。

また、映像・音声の配信や、情報保障のあり方全体に目を配り、必要な人員と作業を割り振ることのできる、統括的な役割を行える人の存在が重要になってくる。必ずしもその人自身が作業内容に詳しい必要はないが、オンライン会合や情報保障に詳しい経験者や情報保障を必要とする当事者をチームに組み込むなどし、意見を取り入れ、決定を行うことが要求されるだろう。

オンラインでの会合であっても、機器やシステムと人々との接合点は必ず存在するのであり、その整備のためには人がアナログな作業を行うことが欠かせない。その過程で人が実際に集まることが避けられない場合もある。通訳者などを交えた打ち合わせやリハーサルには追加費用が発生する場合があるが、可能な限り作業担当者が（オンラインも利用しながら）集まり、問題の洗い出しと改善を行うことが望ましい。ただそれらは、課題や

適切なマニュアルの共有が行われることにより、効率化も可能なはずである。本稿がその一助となれば幸いである。

最後に、機器やアプリケーション、回線についての注意点をいくつか挙げて終わりたい。これらは網羅的な情報ではないが、読者の皆さんのお役に立てば幸いである。

## ■チェックリストと注意

### ■使用デバイス

- ・PC版とタブレット版ではオンライン会合ソフトの機能面に異なりがある場合がある。また、動作の安定性においてタブレットは不安が残る。
- ・ホスト役のコンピュータにはPCを用いること。その他動作が不安定になった場合進行に大きな影響を及ぼす役割の人が用いるデバイスは、PCを用いるようにすること。
- ・止むを得ずタブレットが用いられる場合（遠隔地の手話通訳者などにPCが用意できない場合などが想定される）、必ず有線によるネット接続をお願いすること。
- ・必要に応じ機器の充電を行いバッテリー残量を確認しておくこと。

### ■PCとアプリケーション

- ・OS及び使用するオンライン会議ソフトを適切な状態に更新しておく。
- ・PCの自動更新が会合中に行われてしまわないよう、設定を行っておく。
- ・使用するオンライン会議ソフトのシステム要件を確認し、使用PCが要件を満たしているかチェックする。
- ・機器とアプリケーションの相性などにより、思いもよらぬトラブルが起こる可能性があるため、本番と同じ機材・環境でのリハーサルを、時間に余裕を持たせ行っておくことが望ましい。

### ■回線

- ・オンライン接続に際し、無線と有線では回線の安定性に大きな差がある。また、万全の注意を行ったつもりでも、想定外のトラブルが起こってしまう場合があることは避けられない。司会役、情報保障担当者など、回線の乱れが起こった場合、会の進行に致命的な影響がある人が無線環境となっていないかを必ず確認し、必要に応じて通信環境の整備や有線接続が可能な場所へ

の移動などを行ってもらう必要がある。また運営スタッフや登壇者に回線の乱れが起こった場合に備え、相互フォローが可能となる役割分担を行っておく必要がある。

- ・無線環境が一般的になった現在、有線接続の必要性や、接続方法に明るくない人の方が多数派であると考えられる。また、普段使用されていない有線接続設備は、メンテナンスが必要な状態となっている場合も考えられる。情報の発信・情報保障を行う者の責任を意識し、通信の乱れを起こさないというつもりで、入念に環境整備とリハーサルを行ってもらいたい。
- ・見落とされがちな点として、適性でない規格の LAN ケーブルが使われていたり、ケーブルの劣化が起こっている場合がある（その場合速度・安定性が落ちている）。ケーブルの規格やいつから使用されているのかが分からない場合、新しい物（規格は CAT.6 以上を選ぶこと）に変更した方がいいかもしれない。これにはコストも手間も比較的にかからない。

#### 参照資料

- 中井良平・安田智博 2020 「『障害学国際セミナー 2020』における、生存学オンライン事務局の取り組み その1 ——オンライン事務局の設置・障害学国際セミナーに向けて——」, 障害学会第 17 回大会報告, オンライン開催.
- 中井良平・橋口昌治 2020 「『障害学国際セミナー 2020』における、生存学オンライン事務局の取り組み その2 ——障害学国際セミナーの様子と、今後への課題——」, 障害学会第 17 回大会報告, オンライン開催.

